Toyama College

リカアドオ国際経済理論における貿易の利益

Interest of Trade in David Ricardo's International Economic Theory

中　山　忠　行
NAKAYAMA Tadayuki

1．はしがき

リカアドオの経済学は，極めて抽象的な外観をまとっていたにもかかわらず，反対に極めて具体的な時代の問題と取り組んでいる。すなわち，実践的な問題意識を備えていた。リカアドオの生涯はイギリス産業革命という嵐の50年間にあった。このことは，イギリスが大工場制度を中心とする近代産業国への完全な転化および産業資本主義の勝利を確立することによって，旧体制を決定的に克服していったことを意味している。そして，フランス大革命とナポレオン戦争，大陸封鎖等の大事件が連続的に起った時期であった。リカアドオの経済学はこのような世界史的な問題の進行を背景としながら形成されていったのである。

「リカアドオは多くの原理が商品を生産する費用を取り扱うということを知っていたにもかかわらず，彼は労働費用もしくは，より正確には，労働時間に対して国際貿易の理論を結合させた。明らかに，価値の労働費用の漸進的な放棄でもって，国際貿易の理論は手術を経験しなければならなかった。しかしリカアドオの接近は直接に退けられなかった。それよりも，その接近は彼の後継者によって拡大されかつ修正されたのである。[1]」リカアドオは何をもって貿易の利益とみなすのであろうか。リカアドオは，国際貿易の利益に関する問題を，商品の数量したがって享楽品の総量増加の問題，消費者の享楽する効用増加の問題として取扱っている。そして，貿易の利益をば輸入の面に求めようとする。すなわち，輸入による利益を展開する。「完全な自由貿易制度のもとでは，各国は当然その資本と労働を自国にとってもっとも有利となるような用途に向ける。こ

なかやま　ただゆき（経営情報学科）

NII-Electronic Library Service

Toyama College

の個別的利益の追求は，全体の普遍的利益とみごとに結びついている。勤勉を刺激し，工夫力に報い，また自然によって賦与された特殊の諸能力をもっとも有効に使用することによって，それは労働をもっとも有効にかつもっとも経済的に配分する，一方，諸生産物の全般的数量を増加させることによって，それは全般の利益を普及させ，そして利益と交通という一つの共通の紐帯によって，文明世界をつうじて諸国民の普遍的社会を結成する。[2]」

「古典派経済学者は基本的に成長経済学の方向を見定めていたし，主な関心はいかにして「諸国民の富」が増加するかを説明したのである。産出高を増加させることを説明するのに，特化と分業が特別な注意を与えられていた。労働が手工業的方法に対立するものとして細かい職分によって特化されたときに，いかに多くのピンが生産することができるかについてのアダム・スミスの描写は広く引用され，法則化されたのである。特化と分業の程度は市場の大きさに依存していた。すなわち，多くの市場はかなりの程度の特化と分業を促進しただろう。[3]」そして「「諸国民の富」への外国貿易の貢献についての質問が起った。それは外国貿易が市場を拡張し特化と分業からかなりの利益を与えたということがはっきりと現れてきた。しかしながら，どのような商品が輸入され輸出されるだろうかを示すことと貿易からどんな利益を得るかを示すことがはっきりと議論のせいにすることがまだ必要であった。発展的な理論は比較的優越の法則と呼ばれる。[4]」

リカアドオは主著『経済学及び課税の原理』第7章の冒頭で次のように述べることで彼の立場を明確にしている。「外国貿易の拡張は，商品の数量したがって享楽品の総量を増大させるにはきわめて有力に貢献するであろうが，しかしけっしてただちに一国の価値額を増大させるものではない。すべての外国財貨の価値は，それらとひきかえに与えられる，わが国の土地と労働の生産物の分量によって測定されるから，われわれは，仮に，新市場の発見によって，わが国の財貨の一定量とひきかえに外国財貨の二倍量を取得するとしても，より大なる価値を得ないであろう。もしもある商人が，1000ポンドの額のイギリス財貨を購買することによって，イギリス市場で1200ポンドで売ることができるある分量の外国財貨を取得しうるものとすれば，彼は，彼の資本のこのような使用方法によって20パーセントの利潤を取得するであろう。しかし彼の利得も，輸入商品の価値も，共に，取得された外国財貨の分量の多少によって増減することはないであろう。たとえば，彼がブドウ酒25樽を輸入しようと50樽を輸入しようと，ある時には25樽が，また他の時には50樽を等しく1200ポンドで売れるかぎり，それは彼の利益にはすこしも影響しえないのである。いずれの場合にも，彼の利潤は200ポンド，すなわち彼の資本にたいする20パーセントに，限定されるであろう。そしていずれの場合にも，同一の価値がイギリスに輸入されるであろう。[5]」

「一人の立派な古典派経済学者が国際貿易理論に関する貨幣賃金を持ち込んだということが，リカアドオの国際貿易の著述が現われた後，長くはなかった。1830年の著作で，

NII-Electronic Library Service

Toyama College

ナッソウ・シーニオアは労働生産性の関連性と貨幣賃金における相違を説明する要素として一定の仕事の不愉快さを強調した。ジョン・ステュアート・ミルはまた輸出貿易の構造に関する貨幣賃金の相違の衝撃の認識を暴露した。シニオアの論議では，ほとんど100年後にタウシッグによるかなりの苦心にあるように，輸出産業の生産性は多くの注意がはらわれた，すなわちそれは経済において貨幣賃金の構造の決定に対してきびしいと考えられた。(私は輸出生産性の影響が度を越したと思う。)[6]」

リカアドオが問題としているのは，財貨の数量の増加ということである。そして，外国貿易であれ国内商業であれ，いっさいの商業が有利なのは，生産物の数量の増加であって，生産物の価値の増加ではないのである。比較生産費説は，貿易の成立を説明する理論である。各国が比較的労働費優位をもった生産に特化するのは，絶対的に安価な商品の生産に特化することであるから，貿易は財貨の数量を増加することになるという理論である。「古典派経済学者達は主として成長経済学の方へ方向を見定めた。そして彼らの主な関心はどのようにして「諸国民の富」が増加したかを説明していた。増加した産出高の説明において，特化と分業は特別な注意を払われた。労働が手工業的方法に対立するものとして機能を詳しく述べることによって特化されたときに，いかにして多くのピンが生産されるかもしれないかについてのアダム・スミスの描写は広く引用されそして概括された。特化と分業の程度は市場の大きさに依存していた。すなわち，より大きな市場はかなりの程度の特化と分業を促進するかもしれない。

「諸国民の富」に対する外国貿易の貢献についての質問が生じた。外国貿易が市場を拡張し，そして特化と分業からかなりの利益を与えたということがはっきりと現れたのである。しかしながら，それははっきりと議論のせいにすることが必要であった。すなわち，どんな商品が輸入され輸出されるかということと貿易からの利益を示すことである。発展した理論は比較的優越の法則と呼ばれる。[7]」

註

(1) SEYMOUR E. HARRIS; International and Interregional Economics. McGraw-HILL BOOK COMPANY,INC. New York Toronto London KŌGAKUSHA COMPANY,LTD. Tokyo p.20

(2) DAVID RICARDO; The Principles of Political Economy and Taxation. Everyman's Library. London New York
ディヴィド・リカードウ全集　P.スラッファ編　M·H·ドッブ協力　第1巻経済学および課税の原理　堀経夫訳　156頁。　雄松堂書店

(3) Richard I.Leighton; Economics of International Trade. P.2 McGraw-Hill Book Company. New York. St.Louis. San Francisco. Düsseldorf. London. Mexico. Panama. Sydney. Toronto Kōgakusha Ltd.Tokyo

(4) Richard I. Leighton; Ibid,.P.2 Mcgraw-Hill Book Company. New York Toronto London KŌGAKUSHA COMPANY,LTD. Tokyo

NII-Electronic Library Service

Toyama College

(5) DAVID RICARDO; Ibid., P.77 Everyman's Library London New York
ディヴィド・リカードウ全集　P.スラッファ編　M·H·ドッブ協力　『同書』150頁。雄松堂書店

(6) SEYMOUR E.HARRIS; Ibid., P.20 McGraw-HILL Book Company. New York Toronto London KŌGAKUSHA COMPANY,LTD. Tokyo

(7) Richard I.Leighton; Ibid., P.2 McGraw-Hill Book Company. New York. St.Louis, San Francisco. Düsseldorf. London. Mexico. Panama. Sydney. Toronto Kōgakusha Ltd.Tokyo

2.　リカアドオのシェーマについて

かの有名なリカアドオのシェーマは，イギリス・ポルトガルの両国を例にとり，何れもラシャとブドウ酒を生産しているが，労働費用では，ポルトガルは何れの財貨の生産においてもイギリスに絶対的に優越しているが，特にブドウ酒の生産においてより大なる優越をもっている。この時において，ポルトガルはブドウ酒を，イギリスはラシャを生産することにより，お互いにその生産物を交換するようになる。したがって，この貿易によって，ポルトガルは自国においてこれを生産するよりも一層多量のブドウ酒を取得することになる。「古典派経済学者達によれば，一国は相対的に僅かの労働で生産することができる一商品を輸出し，もしも自国で生産したならば，相対的にかなりの労働を必要とするかもしれない商品を輸入する。一定の商品はすべての国々で同量の労働で生産することができない。好都合な資源は一国を有利に位置していない一国よりも少ない労働で一商品を生産することに充てる。例えば，地面の近くに石炭資源をもった一国は非常に深いところにある石炭資源をもった一国以上に１トンにつきより少ない労働量に向けることが必要だろう。[1]」

勿論，気温，地味，水利，大気等特定の自然的な状況の下にないと事実上生産できない財貨がある。リカアドオは国際貿易の利益を，財貨の種類・数量の増加にあるとみなす。すなわち，特定量の労働と資本でより多種，多量の満足を獲得することができるか・あるいはより少量の労働ならびに資本をもって特定種類，特定量の満足を獲得することにある。結果としては，財貨の豊富と低廉とは消費者にとって有利である。

典型的に資本主義貿易は価格の絶対差に基いて行われることになる。生産可能な財貨については，自国の財貨の価格が低廉であるから輸出することになるし，外国の財貨の価格が低廉であるから輸入することになる。ここからの結論として，貿易をすることから財貨の数量が増加し，価格の下落をもたらすことになる。

しかし乍ら，リカアドオの理論を検討したときには，これとは異なる事情がいま一つ考えられる。それはその国の生産物と交換に輸入される財貨，労働賃金のそれに対して費消されるところの労働者の食物その他の生活必需品の場合である。何故に問題になるかと言えば，このような場合においては，賃金は下落し，資本の利潤は上昇することに

NII-Electronic Library Service

Toyama College

なるということは；リカアドオの理論からくる必然の結果といえる。

利潤率は賃金の低下以外には増大しないし，賃金の永続的低下は，賃金が支出される必需品の下落の結果以外には生じないとリカアドオは『経済学及び課税の原理』で証明しようと努めている。「もしも外国貿易の拡張によりあるいは機械の改良によって，労働者の食物と必需品が低減された価格で市場にもたらされうるならば，利潤は上昇するであろう。もしも，われわれが，自国の穀物を栽培したり，あるいは労働者の衣服およびその他の必需品を製造したりするのではなくて，より安い価格でこれらの商品をわれわれに供給することができる新しい市場を発見するならば，賃金は低下し利潤は上昇するであろう。しかし，もしも外国貿易の拡張によりあるいは機械の改良によって，より安い値段で取得される諸商品が，もっぱら金持によって消費される諸商品であるならば，利潤率にはなんらの変更も起こらないであろう。たとえブドウ酒，ビロード，絹織物，およびその他の高価な商品が50パーセント下落するとしても，賃金率は影響を受けないであろう，またその結果として利潤はひきつづき不変のままであろう。

そうしてみると，外国貿易は，収入が支出される諸物の分量と種類を増加し，また諸商品の豊富と低廉とによって，貯蓄と資本の蓄積とに刺激を与えるから，一国にとって高度に有利であるとはいえ，輸入される諸商品が労働の賃金が支出されるその種類のものでないかぎり，資本の利潤をひき上げる傾向をすこしももたないであろう。[2]」

註

(1) Richard I.Leighton; Economics of International Trade. P.2 McGraw-Hill Book company. New York. St.Louis. San Francisco. Düsseldorf. London. Mexico. Panama. Sydney. Toronto Kogakusha Ltd. Tokyo

(2) DAVID RICARDO; The Principles of Political Economy and Taxation. P.80 Everyman's Library. London New York

3．賃金と利潤について

リカアドオによると，貿易は諸商品の数量の，したがってまた，享楽品の総量の増加に貢献するところ甚だ大きいが，決して即時には一国内の価値量を増加させるものではない。然らば，何故に貿易は生産物の数量の増加となるのか。この解答は，リカアドオの有名な比較生産費説である。この理論は，比較的労働費用優位をもつ生産に特化するということは，結局のところ，絶対的に安価な商品の生産に特化することである。そして，労働費用による貿易の方向と貨幣費用による貿易の方向とが一致することを明確にしたものである。故に，この理論の必然的な帰結は，貿易が財貨の数量の増加を斉すことになるということである。勿論，この外に，気温，地味，水利，大気等という特定の自然的状況下でなければ事実上生産することのできない財貨があり，そういう財貨が貿易の対象になる。したがって，リカアドオは国際貿易の利益は財貨の種類と数量の増加にあるとする。そこで，結果として財貨の豊富と低廉は消費者に有利である。「貿易が

NII-Electronic Library Service

Toyama College

行われる場合には光景は変化する。各国はある商品の生産を増加し，他の商品の生産を減少するかまたは全然生産しなくなる。このことは恐らくは各国がなお生産を続けている商品の生産費に作用するであろう。新しい生産費比率が確立せられるであろう。この新比率がなお外国に存する比率と異なっているならば，貿易をさらに拡張することによって利益が確立せられうる。そしてこれが再び各国の生産費比率に作用する。その結果として，利益を生じる貿易が行われ尽した場合には，各国の生産費比率はもはや外国の生産費比率とは差異をもたなくなるということになる。一国はその生産費比率が外国の生産費比率と同じくなるまで各種商品の生産を拡張または縮少し，かくて発生した余剰を輸出し，不足を輸入すべきである（ある部面においては，生産は全然放棄せられるかも知れぬ。そして貿易開始前には国内における生産費が高失費につくかまたは生産が不可能であるために，消費されなかった商品が輸入されるかもしれない[1]）。

リカアドオの貿易論は，比較的優越をもつ産業に特化することは財貨1単位を取得するに必要な費用の低減を斉らすことになる。これは一定量の費用でより多量の財貨を獲得することになる。

「利潤率は賃金の低下による以外にはけっして増大しえない。そして賃金の永続的低下は，賃金が支出される必需品の下落の結果として以外には起こりえない，ということを本音をつうじて証明するのが，私の努めてきた点であった。[2]」いわゆる，外国から輸入される財貨が，労働賃金がこれに対して費消される食物その他の生活必需品である時においては，賃金は下落し，利潤は騰貴するから，このような国際貿易は直接的にその国の生産者にとって有利である。リカアドオは，賃金と利潤とは相補性をもっていて，一方の騰貴は他方の下落にみちびき，一方の下落は他方の騰貴をひき起す関係にあるということを意味する。「1870年代にイギリスの経済学者ケアンズは単純な労働価値説に対してさらに進んで異論を高く掲げた。彼はあちらこちらと仕事から仕事へと労働の移動における制限や制度上の妨げによって保護された1グループが他のグループよりより高い報酬を受けとるかもしれないということを指摘した。賃金は，ゆえに，労働時間に一致しないであろう。[3]」

註

(1) SIR ROY HARROD; INTERNATIONAL ECONOMICS. P.16-17 DIGSWELL PLACE, JAMES NISBET & CO.,LTD. CAMBRIDGE, AT THE UNIVERSITY PRESS.

R.F.ハロッド著　藤井茂訳　ハロッド国際経済学　改訂版　56-57頁。実業之日本社版

(2) DAVID RICARDO; The Principles of Political Economy and Taxation. p.80 Everyman's Library. London New York

P.スラッファ編　M.H.ドッブ協力　第1巻　経済学および課税の原理　堀　経夫訳　154頁。雄松堂書店

(3) SEYMOUR E.HARRIS; International and Interregional Economics. p.20 McGRAW-

NII-Electronic Library Service

Toyama College

HILL BOOK COMPANY, INC. New York Toronto London KŌGAKUSHA COMPANY.LTD., Tokyo

4．穀物の自由貿易について

リカアドオは穀物の自由貿易を主張する。穀物の自由貿易は，資本利潤を高騰させ，穀物の輸入制限は資本利潤を低下させることになる。したがって，穀物の自由貿易を主張することから，リカアドオもまた生産者・資本家本位の見地に立脚していると言えよう。

そうであるとすれば，穀物の輸入制限は何故に資本利潤を低下させることになるのか。リカアドオによれば，穀物の輸入制限が行われる時には，富の増進と人口増加によって，その食物の供給をば品質の劣れる土地に頼らなければならなくなる結果として，食物の供給が困難となってしまい，その供給される最終部分の生産に一層多量の労働を投下することが必要となってしまい，このために食物の価格が騰貴してしまうことになる。

したがって，限界土地の労働量が食物の交換価値を決定する。食物の騰貴は，労働賃金の騰貴という結果を斉らすことになる。リカアドオにおいては，財貨の価値の全部は，一つは資本の利潤を構成し，他は労働の賃金を構成することになる。この価値の一構成部分である労働の賃金はどのようにして定まるのであろうか。「労働は，売買され，そして分量において増減される。他のすべての物と同じく，その自然価格とその市場価格とをもっている。[1]」　労働の自然価格は，労働者をして，その生活を維持し，増減なくその種族を永続させるために必要とされる価格である。労働の市場価格は，需要に対する供給の自然的作用により，労働に対して実際に支払われる価格である。したがって，労働の市場価格は，結局のところ，労働の自然価格に一致しようとする傾向をもっている。リカアドオは，貨幣価格に変動がないとしたならば，賃金は二つの原因から騰落を免れないとして，次の二つを挙げるのである。「第一に，労働の供給と需要。第二に，労働賃金が支出される商品の価格。[2]」ここから，労働賃金が費消される諸財貨の最大部分を占めている食物の騰貴は，必然的に労働の自然価格の高騰を導くに至る。リカアドオでは，労働賃金の騰貴は利潤の下落となる。ここで，下落する利潤は限界土地における農業資本の利潤だけではない。農業資本の一般利潤は耕作の限界土地における資本利潤により規律されるからして，農業資本の利潤一般が低下する。農業資本だけではなく，商工業利潤もそうである。資本の利潤一般は全く土地に使用される資本の最後の部分の利潤に依存する。故に，下落するのは利潤一般といえる。耕作の改善が行われず，穀物の輸入が制限されることに至れば，資本の利潤は次第に低落の一途を辿らざるをえなくなってしまう。最劣等地の耕作の使用を放棄しなければ，利潤の低下をきたすことになる。

穀物の貿易をば自由にして，外国から低廉な穀物を輸入する場合には，労働の賃金は下落して，資本の利潤は上昇する。資本の利潤が上昇すれば，生産者・資本家が利益を

NII-Electronic Library Service

Toyama College

得ることになる。その限り穀物の自由貿易は生産者・資本家の利益である。

しかし乍ら，リカアドオはそれだけの理由から穀物の自由貿易を唱えるのであろうか。仮に，リカアドオは利潤が高騰するという理由だけから穀物の自由貿易を唱えるとしたなら，そこには混交していることになってしまう。ところが，リカアドオの穀物貿易論は奥深いものがある。それは穀物を輸入することが労働者の利益と矛盾することになり，彼らの利益を蹂躙するものではあり得ないという考えである。穀物を輸入することを抑制すれば，労働の賃金が騰貴する。穀物を輸入することの制限を撤廃すれば，労働の賃金は下落してしまう。これはいかなる意味をもつことになるのであろうか。穀物の輸入を制限すれば，賃金は騰貴することになる。ところが，この場合騰貴するのは貨幣賃金ということであり，穀物賃金は減少することになる。

リカアドオは述べる。「小麦１クォータにつき４ポンドのときに，労働者の賃金は年に24ポンド，すわち小麦６クォーターの価値である，と仮定し，また彼の賃金の半分が小麦に支出され，他の半分，すなわち12ポンドが，他の諸物に支出される，と仮定しよう。彼は，

小麦が	4ポンド4シリング8ペンス	のときは	24ポンド14シリング	すなわち	5.83クォータ	の価値を
	4ポンド10シリング		25ポンド10シリング		5.66クォータ	
	4ポンド16シリング		26ポンド8シリング		5.50クォータ	
	5ポンド2シリング10ペンス		27ポンド8シリング6ペンス		5.33クォータ	

受けとるであろう。

彼が受けるこれらの賃金は，それによって彼が，以前とちょうど同じ程度の生活をすることが可能となるだけであって，よりよい生活をすることはできないであろう。というわけは，穀物が１クォータにつき４ポンドのときには，彼は３クォータの穀物にたいして，

１クォータにつき４ポンドで……12ポンド
そして他の諸物にたいして……12ポンド
24ポンド

を支出するであろうし，

小麦が４ポンド４シリング８ペンスのときには，
彼と彼の家族が消費する３クォータは……12ポンド14シリング
価格の変更しない他の諸物は……12ポンド
24ポンド14シリング

を要するであろうし，

４ポンド10シリングのときには，３クォータの小麦は……13ポンド10シリング
そして他の諸物は……12ポンド
25ポンド10シリング

を要するであろうし，

４ポンド16シリングのときには，３クォータの小麦は……14ポンド８シリング

NII-Electronic Library Service

Toyama College

他の諸物は……12ポンド

26ポンド8シリング

5ポンド2シリング10ペンスのときには，3クォータの小麦は……15ポンド8シリング6ペンス

他の諸物は……12ポンド

27ポンド8シリング6ペンス

を要するであろうからである。

穀物が高くなるに比例して，彼はより少ない穀物賃金を受けとるであろう。しかし彼の貨幣賃金はつねに増加するであろう。それにたいして，前記の仮定によれば，彼の享楽品はまさに同一であろう。しかし，他の諸商品の価格は原生産物がその構成に参加するに比例してひき上げられるであろうから，彼はこれらのなかの若干のものにたいして，より多くを支払わなければならないであろう。[3]」したがって，穀物の自由貿易は，生産者・資本家の利益であるが，だからといって，穀物の自由貿易は労働者の利益と矛盾しているとは言えないのである。換言すれば，生産者・資本家の利益と労働者の利益とは，低廉な穀物を外国から輸入することについては両立することになる。勿論，消費者についてはなほのことと言える。そうすると，穀物の自由貿易によって不利益を蒙るのは誰であろうか。地主であるとリカアドオは言うのである。

リカアドオは，地代とは「大地の生産物のうち，土壌の本源的で不滅な力の使用にたいして地主に支払われる部分である。[4]」と述べる。土地の使用に対して地代が支払われるのは，土地は量において無限ではなく，質において均一ではなくて，位置において便不便があるからといえる。したがって，「資本はむしろ旧地に使用され，そして同様に地代を創造するであろう，というのは，地代はつねに二つの相等しい分量の資本と労働の使用によって取得される生産物間の差額だからである。[5]」豊饒で便利な位置を占めている土地が増殖する人口に対する食物生産のために必要とされる程度以上に豊富に存在している場合や資本と労働が旧土地に対してすこしの減収もなしに無際限に投下することができるとする場合において，地代と地代の騰貴はあり得ない。

実際，土地は有限で品質には差等があるだけではなく，位置がどのようであるかで非常に利便が違うことである。そして，土地は収穫逓減法則に左右されることから，社会が発展していく上においては，最も肥沃であって，最も有利な位置を占める土地が最初に耕作されることになる。第二の豊度と利便をもった土地を食物が不足する解決策として，耕作の拡張をはかることによって，第一と第二の土地における収穫物の差額もしくは収穫物の価値の差額が地代となるのである。そして，第二の土地を耕作することによって，第二の土地においても地代の発生をみるにおよんで，両者の収穫物の差額，あるいは収穫物の価値の差額がその地代となるのである。ここから，第一の土地の地代はそれだけ騰貴するに至る。

土地の生産物の交換価値は，他の一切の貨物の交換価値と同じように，これを生産して市場に運び入れるためには，種々の形態で必要とされるところの総労働量をもとにし

NII-Electronic Library Service

Toyama College

て決定されることからして，品質と位置が劣っている土地が耕作されていくにしたがって，あるいは同一の土地に投下されるところの追加労働量を多くすることから，原生産物の交換価値は次第に騰貴していかざるを得なくなる。この場合においては，原生産物の交換価値を決定するものは，最も不利な事情の下において生産を継続する者が投下するより大なる労働量である，限界土地の生産物に投下される労働量，そうでなければ同一の土地についてであれば，その最終部分の収穫に投下されるところの労働量ということになってくる。だからして，原生産物の比較的に価値が騰貴していく理由は，その取得される限界土地の生産物，あるいは最終的な部分の生産物に対して一層多くの労働が投下されるからであるといえる。「そこで原生産物の比較価値が騰貴する理由は，取得される最終部分の生産により多くの労働が使用されるからであって，地代が地主に支払われるからではない。[6]」そして，「穀物の価値は，なんらの地代も支払わない質の土地において，またなんらの地代も支払わない資本部分も用いて，その生産に投下される労働量によって左右されるのである。穀物は地代が支払われるから高いのではなくて，穀物が高いから地代が支払われるのである。[7]」

このようにして，自然はその贈与に過度にものおしみするにつれて，その労働に対して一層の高い価格を要求することになる。地代の騰貴は，その国の人口が増加することに対して食物の供給が困難となることから生じる。生産収益がより小なる土地への追加資本の投下を必要とするにつれて，その追加資本の各部分ごとには地代が騰貴する。社会の事情によっては，かりにも同額の資本を土地に投下することが不必要になってくるが故に，その最後に投下される部分をば一層生産的ならしめるものは，地代を下落せしめることになるであろう。農業上の改良とか穀物の輸入の場合がそれである。

ともかくも，穀物が高価であるからして地代が支払われるのである。そして穀物価格を決定するのはあの最大労働で生産される穀物であって，地代はその価格の構成要素の中に入らないし，また入れてはならないものであるからには，地代を負担するのは一般消費者ということになる。ここからして，地主と一般消費者は利害が対立するのは明らかで疑う余地がないといえる。

地代は生産物の価格によって規定されるし，必ずといってよいほど消費者の負担になるものである。地代のいかなる部分をも農業生産者は支弁するものとは言えない。農業生産者は地代の騰落に無関心であることになる。このように結論することは正しいとは言えない。それは農業生産者もまた地代を騰貴させないし，むしろ生産物の自然価格を騰貴させないということに明確に利害関係をもっている。というのは，農業生産者もまた原生産物がその構成要素として入り込む諸貨物の一個の生産者として，すべての他の消費者とともに，価格が騰貴しないことによって利益を得ることになる。農業生産者が穀物の高価格に対して重大な利害関係をもつのはなぜかと言えばそれが賃金に影響を与えるからである。穀物の価格が騰貴することは，必ず賃金の騰貴をもたらすことになり，賃金に比例して農業生産者の利潤は逓減してゆくのである。したがって，リカアドオは，

NII-Electronic Library Service

Toyama College

地主と農業生産者ともはっきりと利害が対立するものと結論づけるのであった。そして，一般商工業資本の利潤は農業資本の利潤に依存しているので，地主と商工業者も利害の対立を招くことになる。

労働者についてはどうであろうか。穀物が高価となるにしたがって，労働者の取得する貨幣賃金は多くなるけれども，その支配し得る生産物の数量は減少することになる。そしてその実質賃金は低下することから，境遇の悪化をもたらすことになる。しかし，地主はどうであろうか。地主は，穀物が高価となるにしたがって，明白に二重の利益を得ることになる。第一に，地主は地代としてより多くの穀物を納める。第二には，その穀物の一定量は前よりも多量の他の貨物と交換することができる。したがって，賃金の騰貴と地代の騰貴の間に本質的な差異があることになり，労働者と地主においても，明白にその利害が対立することになる。穀物の騰貴は資本家階級と労働者階級の犠牲のもとに，地主を利するものである。穀物の下落は地主にとっては不利であるが，資本家階級と労働者階級は何れにおいても恩恵を受ける結果となる。したがって，外国から穀物を自由に輸入することになれば，地主は不利益になり被害を蒙ることになる。「リカアドオが最初のそして顕著なメンバーの一人であった，イギリス古典学派の経済学者達はいくつかの共通の特色をもっていた。彼らの中の一人は労働の国内価値論であった。古典学派の経済学者達は一国内の商品価格がそれらを得るために必要とした相対的労働量に比例していたところの主張に結束した。しかしながら，彼らはこの理論が労働と資本が異なれる諸国間で不動であったが故に国際価格関係の場合に応用できたと考えたのである。この点で，それらが国内的範囲から国際的範囲に応用できたときに，価格決定に対する費用の接近は不十分なことを証明した。しかしながら，古典学派は，しばしば彼らの分析を現実の条件と抽象的な価格に言葉で表わすことによって，より直接的に経済的安寧の諸問題により直接的に関連させることができたのである。これは同時に彼らの優柔不断と強みであったのである。[8]」

以上の見解からして，リカアドオは，穀物を輸入することを制限している政策をおしのけようと攻撃して，穀物貿易の自由を主張する。リカアドオは，単に生産者の利益であるからという理由で，穀物貿易の制限を撤廃するべきだと主張しているのではない。低廉な穀物の輸入は，労働者の利益であり，一般消費者の利益になるという。穀物貿易の利益は全体の利益という立場からの把握がなされている。穀物貿易においては，消費者，生産者および労働者の間に利害の融合があるというのがリカアドオの主張であった。リカアドオは，穀物貿易の制限かもしくは穀物貿易の自由かに関する問題をば，地主の為か，もしくは消費者，生産者および労働者の為かという問題として提起したのはこのような理由からであった。リカアドオが穀物貿易の撤廃を主張したのは，消費者，生産者および労働者の間には完全に利害の融合があるということである。利害が相反するのは地主であった。したがって，穀物貿易を制限するか自由にするかについての問題は，結局のところ，地主の為か，もしくは消費者，生産者および労働者の為かの問題に関す

NII-Electronic Library Service

Toyama College

る議論に最終的に落ち着くことになる。ここにおいて，後者の利益を図らんがために穀物貿易の制限を撤廃するべきであるという主張であった。

この立場の堅持は，穀物輸出奨励金の是非についても同じである。リカアドオは穀物輸出奨励金制度に対して反対の立場をとる。それは，輸出奨励金の交付が穀物の貨幣価値の騰貴をもたらすからである。何故ならば，当該国の穀物に対する外国の需要増加は，その市場価格をして自然価格以上に騰貴させるからである。

註

(1) DAVID RICARDO; The Principles of Political Economy and Taxation. p.52 Everyman's Library, London New York
ディヴィド・リカードウ全集　P.スラッファ編　M.H.ドッブ協力　第1巻経済学および課税の原理　堀経夫訳　109頁。雄松堂書店

(2) DAVID RICARDO; Ibid., p.55 Everyman's Library, London New York
ディヴィド・リカードウ全集　P.スラッファ編　M.H.ドッブ協力　『同書』　堀経夫訳　114頁。雄松堂書店

(3) DAVID RICARDO; Ibid., p.52-53 Everyman's Library, London New York
ディヴィド・リカードウ全集　P.スラッファ編　M.H.ドッブ協力　『同書』　堀経夫訳　120-122頁。雄松堂書店

(4) DAVID RICARDO; Ibid., p.33 Everyman's Library, London New York
ディヴィド・リカードウ全集　P.スラッファ編　M.H.ドッブ協力　『同書』　堀経夫訳　79頁。雄松堂書店

(5) DAVID RICARDO; Ibid., p.36 Everyman's Library, London New York
ディヴィド・リカードウ全集　P.スラッファ編　M.H.ドッブ協力　『同書』　堀経夫訳　84頁。雄松堂書店

(6) DAVID RICARDO; Ibid., p.38 Everyman's Library, London New York
ディヴィド・リカードウ全集　P.スラッファ編　M.H.ドッブ協力　『同書』　堀経夫訳　87頁。雄松堂書店

(7) DAVID RICARDO; Ibid., p.38 Everyman's Library, London New York
ディヴィド・リカードウ全集　P.スラッファ編　M.H.ドッブ協力　『同書』　堀経夫訳　87-88頁。雄松堂書店

(8) Stephen Enke. Virgil Salera; International Economics. p.577 Prentice-Holl. Inc. Maruzen Co., Ltd.

NII-Electronic Library Service